

ブラジル長期派遣第三回報告書

武田 翔吾

二月に入り、留学生活もあと残り僅かとなった。今回の報告書は、長期休暇に行った実習について主に書きたい。僕が今回行った農業に関係する場所は、友人宅にお世話になったミナスジェライス州アラージャ、パラカツ。農大の先輩方に受け入れていただいたパラ州ベレン、トメアスー。jicaの方々に案内して頂いた首都連邦区ブラジリアである。お世話になった方々は職種や経歴も様々であったが、皆さま本当に暖かく受け入れてくださり、大変丁寧に案内や助言をして頂いた。その全てのお宅と施設での得がたい体験を、このレポートで書ききる事は到底無理である。よってこのレポートでは、今回の訪問先のうち一つだけに絞って記述したいと思う。

記述するのは、1/7～1/14まで受け入れて頂いた、パラ州ベレン、サンタバルバラ区にある開拓部落（コロニア）、Assentamento Expedito Ribeiroでの実習に関してである（以下コロニアとする）。ここでの生活について記述する前に、まずブラジルにおけるコロニアというものについて説明しなければならない。ブラジルは、非常に経済的格差が大きい国である。大規模農業で有名なブラジルにおいて皮肉なことであるが、少数の富裕層によって多くの土地や富が占有され、土地を持っていない農民や労働者も多く存在している。そんな中、大企業などの地主によって占有されていながら有効的に使用されていない土地に土地なし農民達が侵入、占拠し、最終的に土地の権利取得を目指す行為があり、ブラジルではMST(土地なし農民運動)と呼ばれるラテンアメリカ最大の運動が行われている。このような、政府に頼らず自分たちで土地へのアクセスを主張、実行する辺りにいかにもブラジルらしい逞しさがあると感じる。このコロニアはMSTの組織的運動ではなかったものの、2006年に周辺の都市から人々が集まりオランダ企業のアブラヤシ畑に侵入して開拓してきた経緯がある。このコロニアは総面積500ha、現居住者は約100家族であり、僕がお世話になったミランダ家、マルセリーナ家は2世帯20haの土地を運営している。彼らは自分達の手で土地を切り開いてきた文字通りのパイオニアであるわけだが、実際に接すると開拓者という方々に抱いていたイメージとは打って変わってとても親しみやすい、暖かい人達であった。着いた初日から、まるで親戚や家族のように接してくれたのである。4人いた子供達を始め全員が外部から来た人間に寛容かつ興味津々で、Google翻訳に助けられつつもコミュニケーションは難しくなく、とても新鮮で楽しいものだった。この相手に対する素直な態度と懐の深さはなかなか真似できないが、恐らく子供の頃は誰もが持っていたであろうと思われる純粋さによるものだと感じた。また、彼らの土地には州政府のプロジェクトによる野菜の温室と灌漑設備があり、コロニアの共有地にはjicaと農工大のプロジェクトによるカカオ畑がある。そのようなプロジェクトを呼び込む力の源は外部の人間に対する彼等の姿勢にあるのかもしれないと思う。事実、ほぼ毎日のように宗教関係者や親戚、友人が決してアクセスがいいとは言えないミランダ家に訪問してくるのである。

このコロニアで深く考えたことは、世の中には大きな循環があるということである。自然界には生態系、人間社会には経済があり、その内外に大小無数の循環が存在している。どんな生物もその何かしらのネットワークに所属しており、その参加者達は相手にとって有用なものをお互いにやり取りしながら価値を生み出している。このコロニア創出の運動は、経済的格差によって富の循環が滞ったときに新しいフロンティアを開拓したものであると言えるかもしれない。新たに開拓したフロンティアであっても電気やwifi、生活用品を購入したり農作物を販売したりすることによって経済の枠組みの中で生きていると言えるのである。コロニアの生活は、経済的には厳しい。農作物の売り上げだけでは生計は成り立たず、ミランダ家のお母さんは病気を患いながら市役所の健康保険に関する仕事をしている。そんな状況であっても、自分や他の留學生が体調を崩した際は献身的に看病してくれたのである。看病が終わり暗くなってから、ライトのない自分の部屋でパソコンの明かりだけで保険番号を打ち込んでいく彼女の姿を忘れることができない。人は一人では生きられないというが、その言葉の本質とこれからの生き方について、深く考える機会を得た実習であった。

最後に、これからの留学生活への抱負を書きたい。ブラジル留学に来てから授業や研究室、学生団体といった大学生らしい活動に精を出した前期が終了し、またブラジル農業に関する理解を深めるべく実施した夏休みの実習もまた終了した。これからの後期、ブラジルにおける自分の最後の期間は、自分を受け入れてくれたブラジルで出会った方々との別れ、自分のこの留学における学びの集大成、そして日本にこの学びをいかに還元するか、ということを考え実施していく期間であると思う。がむしゃらに動いてきた前期と比べると、やるべきことははっきりしていて気持ちは落ち着いている。ブラジルの農業に関して、日本移民に関して、またブラジルという国に関して自分が感じて来たことを整理し、しっかりとした考えとしてまとめたい。また自分のモチベーションを具体的に掘り下げて生き、就職活動にも力を入れたい。

ブラジルの方々に対して自分がどんな恩返しができるだろう、と考えてみたが、今の自分には大して実質的な価値を提供できそうにない。最後までできる限り、誠実に接することではないかと思った。

(この報告書の感想はあくまで滞在した家族に向けてのものであり、MSTをはじめとする土地取得運動に対する是非や政治的立場とは無関係である)